

La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA / Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 5 No. 1



トゥールーズ市庁舎

今年で九回目を迎える当財団の「日仏地方高校生交流」プログラムが、今年も高知とトゥールーズの高校生を対象に実施された。高知日仏協会との共催で、今年二月二日から十九日までトゥールーズ・オゼンヌ高校で日本語を学ぶ三年生十五名が高知南高校に滞在。同校生徒の家にホームステイをしながら、その生徒のクラスで毎日一緒に授業に参加、日本の高校生活を体験してもらった。

オゼンヌ高校はトゥールーズでも有数の進学校で、学区内では唯一日本語の授業を選択できる学校だ。週に三時間第三外国語として日本語を学んでいる。

昨年の九月、このフランスの生徒達に日本旅行への招待を告げた。それから出発までは残りの日数を指折り数えながら、「中には授業中感激のあまり、目に涙を

トゥールーズ・オゼンヌ高校生が高知にやってきた



初めての茶道体験・高知南高校にて

浮かべていた生徒もいたんです」と引率の日本語教師ベルガミーニ先生は打ち明けた。それほどまでの憧れの日本。彼らの目にはどう映ったのか。

まずは通学初日の高知南高校生生徒会主催の歓迎会。「校内に体育館もなく、何百名もの生徒が一堂に会することはフランスでは全く考えられません！」と全員がかなり驚いた様子。日本の生徒たちが全員制服姿だった

からなおさらワクワクしたのかも知れない。早くもカルチャーショックがあったようだ。茶道も日本でやってみてみたかった体験のひとつ。見様見まねで恐る恐る抹茶をユクリ。どつやら正座をしたり、茶菓子やお茶の味を確かめるだけで精いっぱいのような。でも何事もまず自分でやってみることが大切なのだ。

高知滞在中はその他、紙すきや禅の修業体験、相撲稽古の見学など、まさに日本に來なくてはできない行事に参加、異文化にたっぷり関わった。

日本を離れる日、フランスの高校生達の満足げな表情が、高知での充実した日々を如実に物語っていた。「夢のような毎日だった。もつと高知にいたい」と日本アニメが大好きなルーノ君。ぎこちなくも、日本でおぼえたおじぎをしながら立ち去っていった姿が印象的だった。

いつの日かこの体験を活かし、将来是非日本とフランスのかけ橋になってもらいたいと思つ。彼ら若い担い手達に心から期待したい。

未完成でもいい、 感じたままの日本を 表現してほしい

昨年九月から清春白樺美術館財団主催による第二回《フランスの若きアーティスト支援のための美術研修》が山梨県北巨摩郡長坂町にある清春芸術村でスタートした。一回目の二倍の六十人近い応募者から三名が選ばれて、美術館に隣接するラ・リュージュでそれぞれ三カ月間に渡り、創作活動が行なわれた。その研修成果を吉井画廊で発表。研修生たちと吉井理事長にお話を伺った。



吉井理事長

モノクロ写真は
一見したところ
意味不明。遠い
惑星の風景のよ
うであり、私た
ちが忘れかけて
いるごく身近な
風景のようでも
あり、様々な想
像の翼を広げさ

せてくれる。そのまま翼を広げて遊ぶ
のが一番だ。種明かしを聞くほど
野暮なことはない。しかし来日して
この写真のどこに日本が含まれて
いるのか。それだけは聞かねばなる
まい。禅寺の庭を手入れする庭師を
見ているうちに、自然に仕えるよう
に仕事する姿に驚きを感じました」

人間が自然に対して常に優位に
立ち、自然を支配してきたヨーロッパ
には人間が自然に仕えるという発想
はない。そこで「ならば、逆に人間

昨年十一月、ヘフランスの若きア
ーティスト支援のための美術研修の
成果が発表された。次いで今年2月
には、十一月に一人遅れて到着した
ガブリエル・スバルヴァゼ(30)さんの
作品が、麻布十番にあるギャラリー・
ラ・リュージュで発表された。

昨年十一月、ヘフランスの若きア
ーティスト支援のための美術研修の
成果が発表された。次いで今年2月
には、十一月に一人遅れて到着した
ガブリエル・スバルヴァゼ(30)さんの
作品が、麻布十番にあるギャラリー・
ラ・リュージュで発表された。



卵を使ったラファエルさんの作品

をただの土壌に見立てて扱おう」。
写真は、いずれも人間の体の一部に
塩や小麦粉、ペンキを施し、その部分
にこれ以上レンズが近づけないほど
近く寄って撮ったものである。たと
えば鎖骨に塩、足の踵の凹みに小麦
粉、男性の髭にペンキといった具合
だ。その体の一部は、あたかも自然
風景がそこに存在するように主張
する。しかし「自然風景をそのまま
コピーするのではありません。自然
の中にある精神を取り出して人間の
体の一部に植え付けることで、その
体の一部自体が自然そのものになる
と思えました」

しかも来日したことで、ビデオ映像
作家であるガブリエルさんの作風は
大きく変化した。「今までも人間や
風景を題材として描いてきました
が、別々でした。ところが今回初め
て人間と自然が合体。同じ世界の中
に描くことができました」

次回作はこれまでのように映像
中心ではなく、来日以来撮った写真
二百点がメインになっていくだろう
と予測。「新たな出発点になった」
と充実した日々を伺わせた。

寺院建築から 日本の美を発見

研修生は、三カ月間清春
村に滞在して日本に触
れ、創作活動に専念。
その間一、二週間は、
各自が自由に各地を旅
行する。三人とも京都
奈良を中心に関西、萩など伝統の
残る街を選んで旅をしている。中で
もやはり欠かせないのは京都奈良。

三人三様に寺院などの建築の空間美は印象強かったようだ。特にラファエルさんの目に飛び込んできたのは、お寺の門に置かれた阿吽の仁王像だ。「まるで遠い昔の記念碑のように立つ迫力はすごい。入り口と外界の境をなす空間の取り方は素晴らしい」。ガブリエルさんは、神社の鳥居をくぐった瞬間に、ある力を感じたという。「それは光。ある悟りを持った感覚です」。パスカルさんも建築美から簡素な豪華さを見て取った。「何でも詰め込む中に豪華さを見いだす西洋とは違って、廊下でも庭でも、何も無い空間の広がり

の持つ豊かさを初めて知りました」。そうした中から紡ぎだされてくるのは、日本の美に共通して言える精神性だ。「いままでのように現実を描くのではなく、精神性を表す方がいい。決めごとでなく、経験して見たまま、感じたままを表現する大切さを知りました」とガブリエルさん。パスカルさんも「日本の美は物質的ではない精神の中に見いだしていくものですね」と同様の感想を持ったのである。

自分を内省させた 清春村での生活

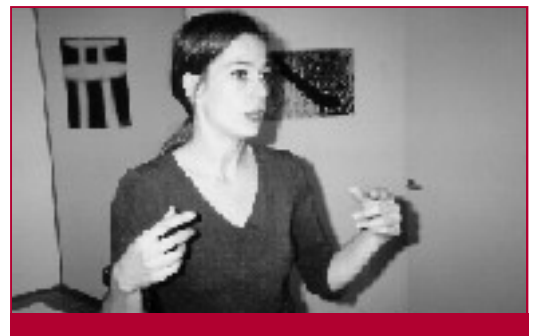
清春村を拠点に創作活動を持った三方月間だったが、そこで生活の聞くことで逆に彼らのフランスでの暮らしが垣間見えてくる。「人に会うより虫に会う方が多かった」と笑いながら話すラファエルさんは、カマキリ、蛾、トンボと、昆虫の多さに驚きを隠せない様子。海に囲まれた国という想像の日本とは随分違ったようだ。それはまた都会生活者の彼だからこそ、昆虫の造形的な美しさに新鮮さを感じ、ドライフラワーならぬドライ昆虫にして作品の中に取り入れていった。そしていつかは「その昆虫や植物を使って子供の絵本を作りたくなった」そうである。

またこの清春での生活は自分自身をみつめる時間にもなっていたようだ。これは来る前には想像しなかったこと。「いままで散歩していても蜘蛛の巣一つにも気付かなかった暮らしをしていた自分に気付かされた」とラファエルさん。パスカルさんも「日本と触れ合うというよりも自分自身が内省できた場所でした」



ラファエル・ロジェ・ドゥ・ヴィレさん

それぞれ三人の胸に自然は何かの形でどまっていたが、それ以上に清春の自然は自身に自ら戻らせる時間を否応なく作り出していた



ガブリエル・スパルヴァセさん

ようである。創作は、内省なくして始まらない。自然がそれを引き出す偉大な力を秘めていることを知るのも今回の研修の目的になり得るのかもしれない。

創造とは「移す」 ものではない

最後に、発表の場となつた吉井画廊の吉井長三氏に三人の作品を見ての感想を伺った。「前回のときにも言いましたが、創造は日本のなものを移すのとは違います。日本を自分の中に取り入れて自分の体で昇華しなければ、作品としての個性にはなりません。たとえ三月と短い期間でも、そこには必ず新しい発見があるはず。描いたり作ったりはパリへ帰ってからでもいいのです。日本にいる間に自分のイマジネーションをどれだけ膨らまし、どれだけ身につけて会得して帰ることができ

るかどうか。」

そういった意味からいえば、ガブリエルさん以外は、日本での生活がまだ昇華しきれていなかったためか、出会った日本を熟成させるには時間がかかり、作品化するのにはフランスへ帰ってからだと異口同音に言っていた。今回の日本の作品はいずれもフランスのアトリエで制作していたものの延長上にあるともいえる。それではこの研修の意味がないと吉井氏は指摘した。「未完成でいいのです。完成品は求めません。違う生活や文化に触れたそのままをその場で形にしてみるんことが大切ですよ」

日本での生活に慣れることと旅することと精一杯で、創作にまで至らなかった二人の様子が思い浮かぶ。しかしどうなのだろう。たとえば舞台芸術にかかわってきたパスカルさん。寺院の木造建築は驚くべきものだ」と印象を強くし、次舞台の作品には木の家を作りたいと構想を話してくれた。そしてその模型ともいえるミニチュアの土の家をつくったという。またラファエルさんは、昆虫や植物を使った子供の絵本をつくることを夢として話してくれた。



パスカル・ランデ・ポペールさん

二人とも日本を離れる最後の発表に、その土の家や絵本を持ち出したならば、その場が何か違うものに変わっていたのではないだろうか。

アートといった時に、フランスでは無言のうちに、筆頭は油絵、彫刻という序列の世界が厳然としてあるという。その中では絵本や土モノは芸術としては成立しない現実がある。日本では陶芸や書、日本画、また油絵などそれぞれの価値を見いだしているため、決して序列の意識はない。そのフランスにいて、土モノや絵本を発表することは私たち日本人が考える以上に無意識のうちのブレーキがかかるのかもしれない。ラファエルさんが「日本では絵本がアートとして扱われていることが羨ましい」と言っていたのを今更ながらに思い出す。しかしだからこそ日本にいるときに、その殻を打ち破るチャンスだったのかもしれない。そんなところにも研修の意味があったのかもしれない。

ガブリエルさんの写真を見て、特に説明を聞いたわけではないが、吉井社長は単純に面白いと評した。その写真には、日本とフランスの違いを感じた彼女の思いが詰まっていたことを、説明を聞くほどに知っていくのである。

パリ本部の 連続講演会が開始!

パリ本部で毎年開かれて
いる、日本に関する講演会
シリーズが今年も全9回の予定で
スタートします。様々な分野で
活躍している研究者やアーティスト
を講師陣に迎え、毎回1時間程度
の講義を行います。終了後は簡単
なカクテルパーティーが行われるの
で、講師や他の参加者との交流を
深めるチャンス。この時期パリへ
行かれる方のご参加をお待ちして
います。

3月 5日(木) 「『私の好きな日本』映画上映とコメント」 イヴ・マコジエ(文化報道記者)
3月29日(金) 「社会変化を写すマンガ」 ジャン＝マリー・ブイスー(パリ政治学院・国際関係研究所研究員)
4月 5日(木) 「人間国宝」 クリスティヌ・ボタン(リヴァージュ協会会長)
4月26日(木) 「20世紀初頭フランスにおける俳句の流行」 ミュリエル・デトリ(パリ第3大学教授)
5月 3日(木) 「フランスにおける日本語教育と適切な教科書の制作」 レモン・洋子(トゥール高等商業経営学校・日本センター所長)
5月10日(木) 「日本の建築と都市における関係と不連続性」 マルク・ディレ(建築家)
6月 7日(木) 「日本における水:文化、伝統と現代的アレンジ」 イヴ・コバックス(土木技師、セビア・コンサルタント代表取締役社長)
6月14日(木) 「日本の現代建築:日仏建築家チームの実践と省察」 マニュエル・タルディッツ(建築家)

お問い合わせ: パリ本部 / e-mail: info@fond-fr-jap-sasakawa.org
Tel: 33(0) 44 39 30 40 Fax: 33(0) 44 39 30 45

A propos de nos projets...

最近の事業から

文学と音楽の新たな ジャポニズムを目指して

3月16日、パリ日本文化
会館でレクチャーコンサート
『俳句と和歌によるフランス
日本歌曲の夕べ』が開催され
た。主催は「俳句・和歌によ
る二十世紀研究会」。今まで
埋もれたままになっていたフ
ランス語の俳句や和歌を歌詞
とするフランスの
歌曲の楽譜を収集、研
究した成果を発表しよ
うとの企画である。

和歌や俳句は19世紀
末から今世紀初頭にか
けてフランスに初めて
紹介され、1905年に
はすでにクーシューが
世界で初めて外国語に
よる俳句創作集『水の
流れのままに』を刊行。
しかもこの作品は1920年には
ブリュアンによって曲がつけられ
ている。

フランス国立東洋文化研究所客
員研究員の柴田氏の調査によると、
日本の俳句や和歌に触発されて
作曲されたフランス音楽は少なく
なく、器楽曲もあるという。それら
の曲がこの日披露されたのである。
また初版楽譜の多くに浮世絵調
の表紙絵がついており、フランス
人による広重や春信などの浮世絵
の模写が描かれているのが興味深

い。ドラージュ『7つのハイカイ』
(1924)の楽譜には藤田嗣次が
絵を描いているだけでなく、パロン
薩摩への献示もあり、当時のパリ
の人間関係がほの見えてくるかの
ようだ。
上演冒頭には、パリ日本文化会館
の磯村館長は、日本人とフランス
人には共通の感性につ
いて言及したが、この
時期にフランスの作曲
家が俳句や和歌を歌詞
としてなぜ取り上げた
のか。そのフランス歌
曲が日本の特性をどの
ように表し、それを西
欧の作曲技法とどのよ
うにかかわらせている
か、と関心は尽きない。
従来の絵画を主とした
ジャポニズムの流れの中に、文学
と音楽のあらたな領域を位置づけ
てもらいたい。



タンスマン
8つの日本の歌
ハイカイ

デルヴァンクール 露の世

写真は、「俳句・和歌による二十世紀研究会」提供

Petite note

編集後記

今年もシャトトレ劇場の滞在研修
オーディションが行われ、2名が合格
現在の研修生はリハールサルで
オペラ主役の代役をしたり、
モンテルディ協会のために演奏を
するなど、大いに頑張っている様子。
来年も期待したい。

(M)
笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

2001年4月発行 Vol. 5 No. 1
発行人: 富永 重厚
編集人: 関 晃典
発行: 笹川日仏財団
〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
TEL: 03 (3769) 6252
FAX: 03 (3769) 2090
E-mail: matsugam@spf.or.jp
http://www.spf.org/ffjs/

プロジェクト・カレンダー
2001年4月〜6月

- 4月1日〜5月31日
《宮沢賢治の世界展・花巻展》
- 《パリ装飾美術学校と京都市立
芸術大学の学生による共同創作》
京都意匠文化研究会/於花巻
- 4月7日〜16日
《フランス人教師日本研修旅行》
- 《高校教科書地理の執筆者を招いて》
全国海外教育事情研究会/於東京
箱根、浜松、京都、奈良、大阪
- 4月28日〜5月8日
《京都の暑い夏2001》
- 《第6回京都国際ダンスワーク
ショップフェスティバル》
京都の暑い夏事務局/於京都
- 5月19日〜22日
《シンポジウム「日仏の
美術・デザインと文学」》
《宮沢賢治・三浦洋子を通して》
京都意匠文化研究会/於京都(予定)
- 6月中旬〜下旬
《日仏学生フォーラムの開催》
《日仏両国の将来を担う》
ヤングリーダーの集い
日仏協会/於東京